ニコルさんが伝えたかったこと

野生動物学研究室教授　高槻成紀

2010 年 3 月 7 日は私の研究生活のなかでも忘れられない一日になると思う。この日麻布大学と C. W. ニコル・アファンの森財団との学術交流協定を記念してフォーラムが開催されたの。それについて、いくつもの思いがあるが、ひとつふたつを書き留めておきたい。

麻布大学に入学してくる学生のかなりの割合の人は動物にやさしくしたいという思いをもっている。ひとつのパターンはケガをした動物を治してあげるやさしい獣医さんになりたいというものだ。しかし獣医学部は難関であり、甘んじて動物応用学科に来たという人もいる。動物を抱っこしたいという感じの動物好きはペット系の研究室を選択する。いっぽうもう少し広く自然の仕組みを知りたいという人もいる。その中には、研究指向の人もあるが、どちらかというと人間が地球に迷惑をかけたことに対する罪悪感のような気持ちから自然の仕組みに関心をもったという人もいる。

そういうことを考えると、どうやらその根底には人間の心の問題があるような気がする。自然や動物にもっとやさしくすべきではないかという思いがあって、そのために役立つこと、あるいは自分のもつそうした気持ちを実現するにはどうすればいいかを求めているように思うのである。しかし、現実の大学は必ずしもそれに応えていない。そうした思いを直接活かすような職業もなさそうだ。現実には就職を探さないといけない。入学の当時の思いは、心情として心のどこかに収めて、現実には納得できる職業選択を考えることになる。そういうのが多くの学生の辿るパターンのように思われる。

C. W. ニコルが伝えたかったことは何だろう。フォーラムの日、ニコルさんはイギリス風のユーモアを交えながら聴衆の心をとらえていった。話は若い頃に北極にあこがれ、親を騙してまで許可をとって学校をさぼって北極行きを実現したことに始まった。強くなりたくて日本に来たが、暑い夏に閉口し、そのことを理解してくれた空手の先生が山につれていってくれた。アルコールをつめた重い荷物をかつがされて泣きたい思いで登った山にはブナの原生林があった。自分の育ったウェールズは開発のために森のない国だったので、ブナの原生林を前にして、ニコルさんは涙が止まらなかったという。それはブナ林のすばらしさへの感動とともに、母国にもこのような林があったはずなのにそれを破壊したことへの嘆きにもよるものだった。

ところがその後の日本人がしたことは、そのすばらしい原生林を伐採しまくることだった。ニコルさんはあらゆる機会をとらえてそのことに反対してきたが、空しいことだった。いっぽう、母国のウェールズは植林によって森が戻ってきて、今ではみごとな森になった。

そしてニコルさんは決心する。自分で森をもって、よい森を作ろうと。それがアファンの森である。その森作りはたいへんなことであったようだが、松木さんというよき相棒を得て、よい林になっていった。動植物がもどってくるだけでなく、森のもつ不思議な力も発揮してくれた。その例として、話の最後に

はつらい体験をした子供たちをアファンの森に招いたフィルムが紹介された。森で遊んでいるうちに子供たちの表情がみるみる明るくなってゆく。

何の説明もないが、ニコルさんの歌と子供の笑い声とが、私たちの魂に直接うったえた。私の心の中はたくさんのものが渦をまいていた。生き物が大好きで、50 年間生き物を見続け、研究者になり、論文を書くことを一所懸命してきた。だが、それがいかばかりのものだろう。産物としての論文などたいしたことはないが、しかしそれを調べたいと思った自分の心はまちがっていなかった。その半世紀のあいだに目の前で国土はどんどん荒廃してゆき、昆虫や植物はいなくなった。それの代償としての私たちの「豊かさ」とはいったい何だったのだろう。そうした思いをもつ人たちがここにこんなにたくさん集まって心をひとつにしている。このフォーラムを実現するためにたくさんの人が準備をし、研究室の学生諸君ががんばってくれた。それになにより、あこがれのニコルさんが私の隣にいてくれている。そうした思いが交錯した。

ニコルさんが伝えたかったのは、ほんとうの意味でのやさしい心をもとうということであったのではないか。日本の皆さんはいったい何を求めて日々生きているのか。豊かになるために森を伐り、心を失っていて、ほんとうによいのですか、と。

日本人全体はことが大きすぎるが、麻布大学だけに限ってみても、この大学はいったい何を目指しているのだろうか。知識と技術を教え込むことが教育だと思いこんではいないだろうか。入学してくる学生の思いにどれだけ応えているだろうか。学生諸君はどうだろうか。初心を貫く努力を、自己鍛錬をどれだけしているだろうか。一番たいせつなのは知識でも技術でもなく、心であるはずなのに、そのことをどれだけ真剣に考えているだろうか。

ニコルさんの話はもっと多岐におよんでいるのだが、私にとって最も大切だと思われるのはこのことだった。今回の学術交流協定は、具体的には調査の便宜や集会の共同開催などをしやすくするためのものではあるが、その精神は自然を通じて人のありかた、国のありかたを考えることにあると思っている。そのことができて初めてニコルさんの期待に応えることができたと言えるのだと思う。